

# 湯どうふ

泉鏡太郎

青空文庫



昨夜は夜ふかしをした。

今朝……と云ふがお午ごろ、炬燵でうとくして居ると、いつも来て囀る、おてんばや、いたづらツ兒の雀たちは、何處へすツ飛んだか、ひつそりと静まつて、チイくと、甘えるやうに、寂しさうに、一羽目白鳥が鳴いた。

いまが花の頃の、裏邸の枇杷の樹かと思ふが、もつと近い。屋根には居まい。ぢき背戸の小さな椿の樹らしいなど、そつと縁側へ出て立つと、その枇杷の方から、斜にさつと音がして時雨が来た。……

椿の梢には、つい此のあひだ枯萩の枝を刈つて、その時引

残した朝顔の蔓に、五つ六つ白い實のついたのが、冷く、は

らくと濡れて行く。

考へても見たが可い。風流人だと、鶯を覗くにも行儀があ

らう。それ鳴いた、障子を明けたのでは、めじろが熟として居

よう筈がない。透かしても、何處にもその姿は見えないで、濃い

黄に染まつた銀杏の葉が、一枚ひらくと飛ぶのが見えた。

懐手して、肩が寒い。

かうした日は、これから霽にも、雪にも、いつもいゝものは湯

豆腐だ。——昔からもこの本にも、人の口にも、音に響いたもの

である。が、……此の味は、中年からでないとは分らない。誰方

の兒たちでも、小兒で此が好きだと言ふのは餘りなからう。十四

五ぐらゐの少年せうねんで、僕は湯ゆどうふがいいよ、なぞは——説明せつめいに及およばず——親おやたちの注意ちういを要えうする。今日けふのお菜かずは豆腐とうふと云いへば、  
二十時はたちじぶん分のまづい顔かほは當然たうぜんと言いつて可いい。

能樂師のうがくし、松本金太郎まつもとぎんたろう 叔父ぢちてきは、湯ゆどうふはもとより、何ど

うした豆腐とうふも大だいのすきで、従したがつて家うちぢう中みなしなが皆嗜みなんだ。その叔父ぢちは

十年じふねんばかり前まへ、七十一こじじで故人こじんになつたが、尚なほその以前いぜん……米こめ

が兩りやうに六升ろくしようでさへ、世よの中なかが騒さわがしいと言いつた、諸物價しよぶつかの

安やすい時とき、月末げつまつ、豆腐屋とうふやの拂はらひが七圓ななゑんを越こした。……どうも平へいみ

民んは、すぐかんぢやうに勘定かんでいにこだはるやうでお恥はづかしいけれども、

何事なにごとも此この方ほうが早分はやわかりがする。……豆腐とうふ一挺いつちやうの値ねが、五ご

厘りんから八厘はちりん、一錢いつせん、乃至ないしにせん二錢にせんの頃ころの事ことである。……食くつたな

！ 何うも。……豆府屋の通帳のあるのは、恐らく松本の家ばかりだらうと言つたものである。いまの長もよく退治る。――お銚子なら、まだしもだが、催、稽古なんど忙しい時だと、ビールで湯どうふで、見るくうちに二挺ぐらゐるりと平らげる。當家のは、鍋へ、そのまゝ箸を入れるのではない。ぶつ／＼と言ふやつを、椀に装出して、猪口のしたちで行る。何十年來馴れたもので、つゆ加減も至極だが、しかし、その小兒たちは、皆知らん顔をしてお魚で居る。勿論、そのお父さんも、二十時代には、右同斷だつたのは言ふまでもない。

紅葉先生も、はじめは「豆府と言文一致は大嫌だ。」

と揚言やうげんなすつたものである。まだ我樂多文庫がらくたぶんこの發刊はつかんに成らなない以前いぜんと思ふおも……大學だいがくへ通はるゝのに、飯田町いひだまちの下宿げしゆくにおいでいの頃ころ、下宿げしゆくの女房かみさんが豆腐屋とうふやを、とうふ屋やさんと呼び込よこむ——小ちひさな下宿げしゆくでよく聞える——聲こゑがすると、「媪ばあさん、又またとうふ豆腐とうふか。そいつを食くはせると斬きつ了しまふぞ。」で、豫かねてこのみの長を船さふねの鞆さやを拂はらつて、階子段はしごだんの上うへを踏鳴ふみならしたと……御自分ごじぶんではなさらなかつたが、當時たうじのお友ともだちもよく話はなすし、おとしよりのちも然さう言いつて苦笑くせうをされたものである。身體からだが弱よわくおなりに成なつてからは、「湯豆腐ゆとうふの事ことだ。……古こ人は偉えらい。いゝものを拵こしらへて置おいてくれたよ。」と、然さうであつた。

あゝ、命日めいにちは十月三十日ぐわつにち、……その十四五日にちまへ前まへであつたと

おも思ふ。……お二階の病床を、久しぶり、下階の八疊の縁さきで、風冷かな秋晴に、湯どうふを召がりながら、「おい、そこいらに蓼蟲が居るだらう。……見な。」「はッ。」と言つた昨夜の昨夜から續いて傍に居た、私は、いきなり、庭へ飛出したが、一寸廣い庭だし、樹もいろ／＼ある。葉もまだ落ちない。形は何處か、影も見えない。豫て氣短なのは知つて居る。特に御病氣。何かのお慰に成らうものを、早く、と思ふが見當らない。蓼蟲戀しく途に迷つた。「其處に居る、……其の百べり日紅の左の枝だ。」上野の東照宮の石段から、不忍の池を遙に、大學の大時計の針が分明に見えた瞳である。かゝる時にも鋭かつた。

睫毛まつげばかりに附着くつついて、小さな枯葉かれはをかぶりながら、あの蓑みのむ  
 蟲しは掛かつて居ゐた。そつとつまんで、葉はをそのまゝ、ごそりと掌てのひら  
 に据すゑて行ゆくと、箸はしを片手かたてに、おもやせたのが御覽ごらんなすつて、  
 「ゆうべは夜中よなかから、よく鳴ないて居ゐたよ——ちゝ、ちゝ——と：  
あき さび…秋は寂さびしいな——よし。其方そつちへやつときな。…殺ころすなよ。」  
をくりかたはら小栗も傍たから手てをついて差さ覗のぞいた。「はい、葉はの上うへへ乗のせて置お  
かる うなづきます。」輕かく頷うなづいて、先せんせい生せいが、「お前まへたち、銚てうし子しをかへな。」  
 ……ちゝ、ちゝ、はゝのなきあとに、ひとへにたのみ參まゐらする、  
せんせいその先せんせいの御壽命ごじゆみやうが。…玄關げんくわんばん番ばんから私わたしには幼馴染をきななじみと  
かき云いつてもいゝ柿かきの木きの下の飛とび石いしづたひに、うしろ向むきに、袖そでは  
 そのまゝ、蓑蟲みのむしの蓑みのの思おもひがしたのであつた。

たゞし、その頃は、まだ湯豆腐の味は分らなかつた。眞北には、此の湯豆腐、たのしみ鍋、あをやぎなどと言ふ名物があり、名所がある。辰巳の方には、ばか鍋、蛤鍋などと言ふ逸物、一類があると聞く。が、一向に場所も方角も分らない。内證でその道の達者にたゞすと、曰く、鍋で一杯やるくらの餘裕があれば、土手を大門とやらへ引返す。第一歸りはしない、と言つた。格言ださうである。皆若かつた。いづれも二十代の事だから、湯どうふで腹はくちく成らぬ。餅の大切なだるま汁粉、それも一ぜん、おかはりなし。……然らざれば、かけ一杯で、蕎麥湯をだぶくとお代りをするのださうであつた。

洒落れた湯どうふにも可哀なのがある。私の知りあひに、御  
 旅館とは表看板、實は安下宿に居るのがあがあるが、秋のな  
 があめ、陽氣は悪し、いやな病氣が流行ると言ふのに、膳に小  
 鯛の焼いたのや、生のまゝの豆腐をつける。……そんな不料  
 簡なのは冷やつことは言はせない、生の豆腐だ。見てもふるへ  
 上るのだが、食はずには居られない。ブリキの鐵瓶に入れて、ゴ  
 トリくくと煮て、いや、うでて、そつと醬油でなくづしに舐め  
 ると言ふ。——恚う成つては、湯豆腐も慘憺たるものである。

……

……などと言ふ、私だつて、湯豆腐を本式に味ひ得る意氣な  
 のではない。一體、これには、きざみ葱、たうがらし、大根

おろしと言ふ、前裁せんざいのつはものの立派りつぱな加勢かせいが要いるのだけれど、  
 どれも生なまだから私わたしはこまる。……その上うへ、式かたごとの如ごとく、だし昆布こんぶを  
 鍋なべの底そこへ敷しいたのでは、火ひを強つよくしても、何どうも煮にえがおそい。  
 ともすると、ちよろ／＼、ちよろ／＼と草くさの清水しみづが湧わくやうだか  
 ら、豆腐とうふを下したへ、あたまから昆布こんぶを被かぶせる。即すなはち、ぐら／＼と煮に  
 えて、蝦夷えぞの雪ゆきが板いた昆布こんぶをかぶつて踊をどりを踊をどるやうな處ところを、ひよ  
 いと挾はさんで、はねを飛とばして、あつ／＼と慌あわてて、ふツと吹ふいて、  
 するりと頬張ほぼる。人ひとが見みたらをかしからうし、お聞ききになつても  
 馬鹿ばか々々しい。  
 が、身みがつてではない。味あじはとにかく、ものなまの生なまぬるいよりは  
 此この方が増ましだ。

時々、婦人の雑誌の、お料理方を覗くと、然るべき研究もして、その道では、一端、慢らしいのの投書がある。

たとへば、豚の肉を細くたゝいて、擂鉢であたつて、しやくしで搦つて、掌へのせて、だんごにまるめて、うどん粉をなすつてそれから捏ねて……あゝ、待つて下さい、もし……その手は洗つてありますか、爪はのびて居ませんか、爪のあかはありませんか、とひもじい腹でも言ひたく成る、のが澤山ある。

浅草の一女として、——内ぢやあ、うどんの玉をかつて、油揚げと葱を刻んで、一所にぐらく煮て、ふツくとふいて食べます、あつい處がいくのです。——何を隠さう、私は此には岡惚をした。

いや、色氣どころか、ほんたうに北山だ。……湯どうふだ。

が、家内の財布じりに當つて見て、安直な鯛があれば、……

鮎でもいゝ、……希くは菽乳羹にしたい。

しぐれは、いまのまに歇んで、薄日がさす……楓の小枝に残つ

た、五葉ばかり、もみぢのぬれ色は美しい。こぼれて散るのは惜

い。手を伸ばせば、狭い庭で、すぐ届く。

本箱をさがして、紫のおん姉君の、第七帖を出すのも仰

々、しからう。……炬燵を這つてあるきさうな、膝栗毛の續、

木曾街道の寢覺のあたりに、一寸はさんで。……

大正十三年二月





# 青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二十七」岩波書店

1942（昭和17）年10月20日第1刷発行

1988（昭和63）年11月2日第3刷発行

※題名の下にあった年代の注を、最後に移しました。

※表題は底本では、「湯《ゆ》どうふ」とルビがついています。

入力：門田裕志

校正：川山隆

2011年8月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 湯どうふ

泉鏡太郎

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>